

岡山県における木炭重要物産同業組合の動向 —— 生産・流通改革の視点から ——

竹内 庵

The Movement of Charcoal Trade Associations for Important Products (Mokutan Juuyou Bussan Dougyou Kumiai) in Okayama Prefecture
— From the Viewpoint of Reformation of Production and Distribution Process —

Ihori TAKEUCHI

ABSTRACT

While Trade Associations for Important Products (Juuyou Bussan Dougyou kumiai) in the charcoal industry in Okayama Prefecture were founded rather late as compared with other trade associations in the Taishou period, those Charcoal Trade Associations in Okayama clearly show the important aspects of trade associations which haven't been studied so far in the historical studies of trade associations (policy) in Japan. To put it in short, Charcoal Trade Associations in Okayama played very significant roles in reforming production and distribution process of the industry, responding to the market structural change in the period toward early Shouwa. This paper clarified those facts.

KEYWORDS : trade associaton, early Shouwa

はじめに

明治以降のわが国の近代社会に登場した同業組合の存在は巨大な山をなしているように思う。しかしその全容の解明には必ずしも未だ至っていないというのが現在の研究状況といえよう。確かに同業組合に焦点を当てた研究が1980年代以降相当蓄積されてきたことによって、その実像がずいぶんと明らかにされたが、現在の研究状況では、未だ同業組合の歴史的意義が十分に捉えきれていないように思うのである⁽¹⁾。特に大正期以降の同業組合の実態分析がさらに進められるべきではないかと筆者は考える。既成の概念にとらわれないで同業組合の動向それ自体に率直に目を向けてみる必要があるではないかと思うのである。

このような観点から、本稿は岡山県における木炭重要物産同業組合をとりあげ検討することにした。そしてわが国の同業組合の歴史的意義・役割の探求に向けてさらなる検討の1頁を加えることにしたいと思う。本稿の結論を先取りするならば、岡山県の木炭同業組合の事例によれば従来の同業組合理

解と相当に違った姿が見えてくるということなのである。そうした姿を歴史的事実として提示してみようというのが本稿の趣旨である。

本論に入る前に、本稿との関連で岡山県の重要物産同業組合全体の動向について若干振り返っておくことにしよう。岡山県でもいくらかの業種において県下の個別の同業組合を繋ぐ同業組合連合会が大正以降に結成されていったが（織物、薄荷、木炭）、そうした同業組合法に基づいた連合会組織とは別に大正14年に重要物産同業組合全体を繋ぐ連合会（岡山県重要物産同業組合連合会）が私的団体として成立した。しかもこの連合会の結成を主導したのは岡山県であった。こうした動きを見ただけでも、県の政策的関与をも入れてこなければ岡山県の同業組合の動向は正確には捉えられないことが理解できるのである。特に大正末以降の岡山県の重要物産同業組合を問題にする場合この点が一つのポイントになるということである。この点に留意しておきたい⁽²⁾。

尚本稿が対象とする木炭重要物産同業組合については、既述のように実は昭和3年に当時県下各郡に成立していた6つの木炭重要物産同業組合を統括す

る連合会が結成されたことが重要である。しかもこの連合会結成にも県の指導が大きな役割を果たしたことが明らかである。本稿ではこうした点については直接触れることはできないが、岡山県重要物産同業組合連合会の動向と共に、木炭同業組合に対する県行政の関与を念頭に置く必要があることをここで指摘しておきたい。

次に本稿の具体的な分析方法と手順について若干のことを予め述べておこう。主として依拠する資料は前稿と同様『岡山県重要物産同業組合誌』⁽³⁾であるが、基本的な観点は木炭業に関わる同業組合が一体斯業に何をもたらしたかを『組合誌』の記述から率直に引き出してみるということである。具体的には組合が斯業の生産・流通にどのような変化をもたらしたかということ。もとより一般的には『組合史』の類は組合活動の自己評価であるから記述は甘くなる傾向は否定できないだろう。また組合内部の階層性までは記述がなかなか及ばないだろうといったことが考えられる。しかしそうした点を考慮に入れた上で本稿では敢えて記述そのものを取りあげることにしたい。尚別稿でも指摘したが⁽⁴⁾、本『組合誌』の極めて優れた点として昭和初期段階まで県下同業組合(連合会)全体について、各組合の生産量のデータはもとより、ほとんど例外なく創立以来の組合事業費の詳細を掲載していることを想起しておきたい。特に組合事業費は客観性が高いと考えられる。筆者が『組合誌』の記述それ自体の検討を試みたのはこうした事実裏打ちされた記述である点を重視したことによるのである。

以上のことを予備知識としておさえた上で、以下本論に入ることにしよう。尚昭和4年末段階で木炭重要物産同業組合は6組合、英田郡勝田郡木炭同業組合(大正6年設立)、阿哲郡木炭同業組合(大正7年設立)、川上郡木炭同業組合(大正9年設立)、苫田郡木炭同業組合(大正10年設立)、真庭郡木炭同業組合(大正11年設立)、岡山県久米郡木炭同業組合(大正15年設立)が活動していたが、資料の状況により英田郡勝田郡木炭同業組合を除き他の5組合を中心に順次見ていくことにしたい⁽⁵⁾。

1 阿哲郡木炭同業組合

重要物産同業組合として当組合が成立をみたのは大正7年であった。岡山県においても木炭の重要物産同業組合は他の業種に比べ時期的には遅いといえる⁽⁶⁾。当地方における木炭業は近世以来の製鉄業の関連産業として発展しているが、明治以降になり製鉄業の衰退に伴い木炭需要の構造が一般家庭用にシフトするという変化の中で当業者は大正期にむけて対応を模索していく。そうした動向の中で重要物産同業組合が結成されていくのである。『組合誌』の記述をフォローすることによってその間のプロセスを確認してみよう。

……近代に至りては明治初年に於て斯業の発達を見たるも明治十年頃輸入鉄に圧倒せられて製鉄事業の衰頹頓挫を来せしが、時恰も一般家庭燃料として本郡産木炭の需要の途開かるゝに至り幹流高梁川船楫の便によりて下流酒津、玉島地方に搬出するに及び漸次製炭業発達の気運を醸成せり、然りと雖も前記の如く本郡木炭は其の起源を製鉄事業に発したるものなれば当初一般燃料に黒炭を供給せしが需要供給の関係上漸次白炭に代り備中木炭として稍々消費都市に認めらるゝに至りたるも、由来製鉄用製炭の習慣全く離脱せず製品の品位を考慮せざるが為め粗製濫造の弊風存じ俵装量目に一定を欠き為めに木炭仲買人に於て更に改俵して市場に搬出する事となり、如斯は啻に仲買者に利益を壟断せらるゝのみならず、市場に声価を發揚することを得ず久しく地方産業の一大欠陥たりしが之れが改良を企図する為め、大正五年末木炭同業組合設立の議起り……⁽⁷⁾

以上によって明治期には木炭の需要構造の変化にも拘わらずそれらに充分対応できず、それまでの「製鉄用製炭の習慣全く離脱せず」の状況であったことが述べられている。この状況の中で特に注目したいのは引用資料の次の部分である。「製品の品位を考慮せざるが為……」以下の記述は極めて注目される。粗製濫造、規格の不統一といった生産地の状況が仲買人の機能を高め、「如斯は啻に仲買人に利益

を壟断せらるゝのみならず、市場に声価を發揚することを得ず久しく地方産業の一大欠陥たりし」と記しているのである。そしてそれが組合結成の動きに繋がったと述べるのだが、この記述を発見したとき筆者は一瞬目を疑ったものである。一般的な同業組合における商人と生産者の関係についての理解とはかなり異なる事例といわざるをえないだろう。実は本稿を思い立った契機は岡山県における木炭同業組合のこうした事実関係の発見であった。

組合結成への動きは、その後第一次大戦による一時的な市場の変動を経過する中で、大正7年10月に結実している。組合結成後の組合活動の状況を少し引用しておこう。

……爾来検査員二十二名を任命して製品統一、俵装改良、撰別、量目の一定等に関し厳重に検査を施行し一面販路を調査して嗜好に適する改良を施し製炭法を研究して利用率の向上を企画し、講習講和会の開設販路拡張と声価の發揚に銳意力を致せり。

而して近時交通機関の漸く開くるに及びて一般市場は黒炭を要求するの趨勢となり白炭は漸次其の影を薄くするの状況なるを以て大正十四年黒炭製造に技術を有する製炭教師一名を黒炭の先進地たる静岡県下より招聘せるものにして之が経費一カ年壹千七百餘円を支出して専ら組合員の指導に任せしめ、年次成績の跡を留め黒炭改良の燭光を認め品質優良既に需要地の歓迎を受くるに至れり、又一方白炭は本県設置の指導技術員を聘して度々改良の実地講習を行ひ其の結果大に品位の向上を來せるは既に一般の認識せる処なり。

如斯一面製炭法の改良と共に撰別、調製、俵装等に関し検査の励行を期し着々として改良の域に進み同業組合創立以来正に十カ年の歳月を閲し本郡木炭界の状況実に昔日の面目を一新せるの觀を呈せり⁽⁸⁾。

以上の記述を仔細に読めば、生産地における製造過程の改革が進展したことは明らかと思われる。製炭技術については静岡県から教師を招き1,700円もの金額を支出している等特に力点が置かれていた

ことが解る。製造過程の変化は当然流通にも影響するだろう。こうした点について別の個所から引用してみよう。

……他面同業組合の活動に依り漸次優良木炭の産出を見るに至り其の販路の如き阪神地方は素より東京市、茨木（ママ）、埼玉県地方へ搬出するの盛況を呈しつゝ昭和の時代に移れり、昭和二年十月郡民多年の宿望漸く達成し鉄道伯備線の開通に伴ひ交通運輸至便となり、山陰地方より続々仲買商人の進出を受け今や本郡製炭界は需要の趨勢に対比し供給之れに伴はざるの現象を呈するに至れり⁽⁹⁾。

以上から大正期には「同業組合の活動に依り漸次優良木炭の産出を見るに至り」本郡木炭の市場は阪神地方から関東方面にまで拡大していることが解る。さらに昭和2年の鉄道伯備線の開通による流通上の新たな変化が指摘されており、「今や本郡製炭界は需要の趨勢に対比し供給之れに伴わざるの現象」を生み出すに至っている。

以上の記述から、詳細はともかく基本的な生産・流通上の変化（改革）が進展したことは読みとれるのではなからうか。そうした変化に木炭同業組合は深く関わっていたといえるのである。

尚、「販売方法及販売組織の変遷」について、明治期の状況が若干述べられているので一部を示しておこう。

製鉄に附属せる木炭は予約販売に依りたるべく明治の年代に於ける販売上に関する一般の狀態次の如し。

一、専ら問屋業者より資金を仰ぎ製品は当該問屋へ販売せるのみにして一種の予約取引の性質を有せり。

二、経済知識の向上と交通機関の完備等時代の変遷に伴ひ前項の方法は漸次改革せられて製炭者任意に販路を求めて取引を為すに至れりと雖も未だ個人販売の域を脱せず且つ販路も多くは本郡内に限られたるの觀あり⁽¹⁰⁾。

ここでは製鉄業を軸とした木炭需要の構造に対応した流通構造（問屋を中心とする）が端的に指摘されていると思うが、「前項の方法は漸次改革せられ

て製炭者任意に販路を求めて取引を為すに至れり」といった生産・流通上の変化の方向が示されているといえよう。組合設立以前の基本的動向であったといえよう。

本節の最後に、「組合の設置が組合員及営業上に及ぼしたる影響」について若干の記述があるので一部掲げる。

イ、製鉄用木炭として粗悪なる黒炭の産出は一時本郡炭界を寒心せしめたるものありしが製鉄事業の休止と同業組合の設立により、従来の劣悪なるものを一掃し得たと共に他府県より木炭組合宛共同購入の斡旋を依頼し来るもの年次増加の傾向を辿れり。

ロ、従来仲買商人は自家に於て一度撰別改俵の上移出し来りたるものなりしが組合の組織によりかゝる煩雑と手数を省き、生産品を其儘直に移出を行ふことを得るに至りたるは全く木炭同業組合の賜にして営業者の最も利便とせる所なり⁽¹¹⁾。

イ、ロの記述は昭和5年段階における阿哲郡木炭同業組合の活動の総括的自己評価といえるものだが、既に述べたように、こうした内容は従来の同業組合理解とは相当異なる様相を示しており、極めて注目されよう。イは明治期以降の製鉄事業の休止に伴う市場構造の変化への対応に同業組合が大きな役割を果たしたこと、結果として本郡木炭の需要が年々増加傾向にあることを記述している。ロは組合設置により従来の仲買商人の機能が低下し、「生産品を其儘直に移出を行ふことを得るに至り」と述べ、この変化を「全く木炭同業組合の賜にして営業者の最も利便とする所なり。」と評価しているのである。

以上のように見てくると、阿哲郡の同業組合の製炭業における位置・役割がかなり明確に読みとれるのであり、研究史における大正以降の同業組合の一般的評価と異なる実態といえるのである。以上で阿哲郡の検討を終え川上郡に目をやることにする。

2 川上郡木炭同業組合

川上郡の製炭業については製鉄業との関連についての記述はないので、阿哲郡とはかなり状況が異なると思われる。明治期には粗製炭しか生産できず、しかも交通の便が悪いため販売市場も狭かったようである。そこで明治30年代頃から県の製炭教師を招き製造伝習会を開くとか、大阪府豊野郡に伝習生を派遣するとかの試みもしているが、需要に対応した製炭技術にまではなかなか到達できなかったようである。川上郡木炭同業組合の成立は大正9年であるが、明治40年代以降の状況について『組合誌』は次のように記述している。

爾來木炭改良は全然放任の状況にありしを以て星霜を重ねるも更に旧來の面目を改めず、市場の嗜好に適せざりしかば成羽町佐藤喜太郎氏之を甚だ遺憾とし明治四十一年成羽町及吹屋町の木炭仲買業者を以て組合を結び俵装は兩端の太き木口を柴口に改め、且粉炭を除去し大俵は正味十貫匁、風袋は一貫五百匁となすべき事を約し宣伝大に努め稍々改良の燭光を認むるに至りたりと雖も、尚上炭に中炭を混入し市場の信用を挽回することを得ず、更に大正三年十二月俵装を角俵に量目を六貫二百匁仕立とし上中炭の撰別を厳にすると共に竿、荒、割等の名称の下に十余種に区別すべく唱導したるも兎角俵装量目一定せず生産の大部分は旧慣を脱せず、大俵を生産し仕向地仲買業者に於て改俵撰別して消費者に供給するの狀態なりしかば価格最も低廉にして利益の大半は仕向地仲買業者に壟断せられ当業者の不利益少からざるを認め、大正六年十二月二十三日創立総会を開き川上郡木炭組合を設立し爾來各品種別に俵装量目撰別程度を規定して製品を検査し製炭講習会を開催して製品を改良し販路を調査し以て市場の要望に沿うべく、専ら改良に力を盡し大に面目を一新するに至りたりと雖も法定組合にあらざれば運用上支障少なからざるを以て大正九年十月二十六日同業組合設置の認可を得組合は更に製品検査、製炭講習、巡回指導、販路調査に鋭意力を盡し其

の指導宜しきを得たと営業者の自覚発奮と相俟ちて旧来の日焼も大に改良し製炭増収は山林価格に影響し、当業者能く定款を遵守し検査又厳にして市場の歓迎を得茲に全く旧来の陋習を打破して一新紀元を画せり、現時に於ては検査規格に依り取引行はれ常に市場の好評を得るに至れり⁽¹²⁾。

以上の長い引用文は、阿哲郡とは異なる川上郡木炭業の生産・流通上の特徴を簡潔に示している。まず明治40年代には生産地サイドにおいて、製品規格の統一をはじめとする木炭改良の試みが、産地仲買業者を中心とする組合結成を通じてなされたことが記されている。しかしこうした試みは市場の信用を回復できず、その後大正期に入っても「生産の大部分は旧慣を脱せず」の状況を伝えている。われわれが特にここで注目したいのは次の記述部分である。「大俵を生産し仕向地仲買業者に於て改俵撰別して消費者に供給するの狀態なりしかば価格最も低廉にして利益の大半は仕向地仲買業者に壟断せられ当業者の不利益少からざる」としているのである。生産地から大俵で仕向地仲買業者に送られた木炭はそこで改俵撰別され消費者に供給される状況が、結果として仕向地仲買業者の地位を高め利益の大半が吸収されているということなのである。川上郡の場合、生産地内部の統制が充分にとれていないことが「仕向地仲買業者に壟断せられ」る状況を生みだし、そのことが当業者の最大の問題として捉えられ、その解決のために同業組合設置の動きが本格的に開始されたと読みとれるのである。具体的には大正6年に始まり数年を要するが、大正9年に国法による同業組合が設置されたのである。

その後の状況は、組合活動の進展と共に「旧来の日焼も大に改良し製炭増収は山林価格に影響し、当業者能く定款を遵守し検査又厳にして市場の歓迎を得」と述べている。

川上郡木炭業の場合、他郡の場合もほぼ同様と思われるが、製炭技術はもとよりであるが規格統制が重要な要素になっており、その規格統制をどの段階で誰が行うかが製造・販売上の最大の問題点であったようである。いずれにしても川上郡の場合「仕向

地仲買業者」対策が重要物産同業組合設置の当面の背景であったといえよう。その意味で当組合は流通改革を担って登場したといえるのである。

次に生産地内部における問題に今一度目をむけてみよう。もとより詳細を示す資料は見あたらないが、「川上郡木炭の起源及現在に至る変遷」と題する記述部分はかなり生産地における実態と組合の意義を伝えていると思うのでその部分を示してみよう。

黒焼は高倉村外東南部に僅かの生産あるのみにして大部分は白焼にして俵装量目撰別区々にして生産の大部分は経営者原木を購入し製炭者は製炭俵数により賃金を得るの制度なれば良品を製出するも利益少きと製炭技術習得の機会も無く、且自ら発奮研究するの向上心薄く粗製多収の習ひありし為め品質劣悪なりしが大正六年川上郡木炭組合設立に依り改良其の緒に就き、更に大正九年川上郡木炭同業組合設立せらるゝに及び永年の陋習を打破し経営者製造者共に自覚し日焼止焼検査等級により賃金の等差を設くるに至り製炭者自ら原木を購入経営するもの増加し日焼も大半止焼となり品質収炭率共に向上し全く其の面目を一新するに至れり⁽¹³⁾。

この地域では生産の大部分は「経営者」が原木を購入して製炭者に供給し、「製炭者」は製炭によって賃金を得るという制度が一般的であったようであるが、こうした制度では「良品を製出するも利益少きと製炭技術習得の機会も無く、且自ら発奮研究するの向上心薄く粗製多収の習ひありし」の状況を呈していたという。ここでの「経営者」がどういう存在か、既述の「木炭仲買業者」とどう関連するのか等必ずしも明らかではないが、製炭者はあくまでも直接生産者であり「経営者」は生産者に原料を供給し製品を受け取るいわゆる「問屋」的存在であったと思われる。この状況が組合設置後どう変化したか。後段は経営者と製炭者との関係変化を簡潔に示している。

「永年の陋習を打破し経営者製造者共に自覚し」にまず注目したい。両者が共に自覚したと指摘している点に留意しておこう。それには組合検査による等級の確定とそれに伴う賃金の等差設定が作用した

ようで、こうした延長線上に「製炭者自ら原木を購入経営するもの増加」といった現象が生まれ、結果として「品質収炭率共に向上し全く其の面目を一新するに至れり」と記しているのである。この過程で生産者の自立性が高まったことは間違いなからう。以上の川上郡木炭同業組合の事例は、わが国の同業組合（政策）史研究に照らした場合極めて重要な意味をもっているといわねばならないだろう。川上郡の場合、産地内部における構造変化だけではなく産地から消費地までの流通構造にも影響を及ぼしていることが明らかになり、この点特に注目されるのである。

本節の最後に、既述の「仲買業者」に関連した記述が「販売方法及販売組織の変遷」なる個所に若干あるのでみておこう。

各地の生産品は成羽町及成羽川流域に点在せる仲買業者之を蒐集し各仕向地へ輸送しつゝ、ありしが近時交通運輸至便なるに至りし為め直接生産者と需要者と商談をなすものを生せり⁽¹⁴⁾。

ここでは交通の発達との関連のみが指摘されているが、仲買業者の地位低下と生産者と需要者の直接取引の増加という流通の変化が述べられている。

以上で川上郡を終え苫田郡に目を移してみよう。

3 苫田郡木炭同業組合

岡山県下の木炭業における同業組合活動の展開を前提に、昭和3年には各郡の同業組合を統括する岡山県木炭同業組合連合会が結成されたことは既に述べたが、その連合会結成には県の指導的役割が大きいことも述べた。ところで連合会の前提になる各郡の同業組合の成立に至る過程をみていくと、郡長をはじめとする郡レベルの行政と深い関わりがあることが明らかになってくる。郡長の指導的役割が記述から明確になる組合だけをみても、阿哲郡⁽¹⁵⁾、苫田郡⁽¹⁶⁾、真庭郡⁽¹⁷⁾、久米郡⁽¹⁸⁾、の4組合が指摘でき、阿哲郡、苫田郡、久米郡については郡長自らが組合長に就任して組合活動をリードしている。岡山県の木炭同業組合を検討する場合こうした政策動向も視野に入れる必要があるのである。

そこで苫田郡木炭同業組合の検討に移ろう。当郡の木炭業の起源も製鉄業との関連にあることが「地域内に於ける木炭の起源及現在に至る変遷」に述べられているが、明治以降の状況から大正期の組合結成に至る動向を「組合の沿革」から若干窺うことにしよう。

……製炭法たるや在来的踏襲に止り極めて粗放にして改良の意志乏しく品質其の他調整上に於ても各村相異りて改善統一を欠きたる点頗る多く当業者の不利少からざるを認め、茲に大正七年以来郡内有志は之が機関の必要を唱導し郡当局に於ても当時の郡長村松翠之輔氏ら之に努力せられ、大正九年七月一日苫田郡役所樓上に創立総会を召集し諸般の決議を行ひ遂に大正十年三月重要物産同業組合法に基き本組合の設立認可を見るに至れり。当時は製造業者五百九十五名、販売業者二百二十三名にして組合設立以来逐年隆盛を見るに至る。就中村松郡長及主席書記上原良介の両氏は当時組長、副組長として意を本組合事業に用ひ其の盡瘁せられたること多大なりとす、続いて大正十二年五月小沼敬三郎氏苫田郡長となるに及び同氏組長に就任し之亦本組合の為め熱心に盡力せられたり、此当時は販売業者側相当有力なりし為め総て組合事業経営上に於て支障を招致し販売業者側の煽動に依り組合員の思想悪化し種々の悪宣伝を行ひ、遂に組合員をして九百余名の反対者を以て組合解散の申請をなす等意外なる紛擾を生じたることありしも時代の趨勢には抗し難く且又組長以下組合幹部の指導宜しきを得たる結果遂に之が紛擾を一掃し組合の安定を期し得たり。大正十五年六月郡役所廃止後同氏の辞任により奥松蔵氏組長となり現在に至る⁽¹⁹⁾。

以上の記録によれば、当郡における木炭同業組合の創立から大正期における組合運営の過程において郡当局の役割が極めて大きいことが想定できるのである。尚以上の記述の中で、特に注目したいのは大正12年頃の当時「販売業者側相当有力なりし為め…」としている点で、これが組合運営上の大きな問題点として捉えられていることである。そしてそれ

らの問題を処理し一掃したと記しているのであるが、その場合処理が可能であったおそらくその背景について述べていると推定するが、「時代の趨勢に抗し難く」としていることにも留意しておきたい。阿哲郡、川上郡で既に検討したように、消費地市場と共に生産地における構造変化がこの時期には進展しており、そうした県内外の一般的变化を意識した表現ではないかと推定する。

さて次に「取引の変遷」の記述が、郡内における取引の変化の概要を示しているのでみておくことにしたい。

……明治十八、九年頃より阪神地方へ移出せらるゝに至れり、本県下に於て阪神地方と取引をなすに至りしは蓋し本郡を以て嚆矢といふも過言にあらず阪神地方に於ては以前より作州炭として知られたるものなり、然るに中国鉄道の開通に依り鉄路を以て移出せしが最近に至り因美、作備兩線の開通を見るに至り、郡内数力所の駅より直ちに県外に移出取引せらるゝに至れり、而して之等の取引状況を観るに往時は津山問屋業者の手を経て売捌かれたるも近時交通発達に伴ひ各市場と生産者直接取引するもの日に増しつゝあり、加ふるに本組合に於ても亦相当販路拡張に努力し各生産者に多大なる援助を与へ漸次之が拡張を見るに至れり故に近来製炭をして共同販売施設を促進せしめ各村にも団体的に販売するもの増加し特に郡内上齋原村、奥津村、泉村、阿波村、香々美北村等の如きは最も販売方法の進展しつゝある為め近き将来に於ては全部を通じて生産者共同販売の施設を觀るの傾向あり⁽²⁰⁾。

以上の叙述は明治10年代から大正期にかけて取引上極めて大きな変化がみられたことを示している。前半部分では阪神地方を始めとする県外市場への取引が鉄道交通の発達によって変化しつつあることを示している。従来津山の問屋業者を通じて移出されていた流れが、「近時交通発達に伴ひ各市場と生産者直接取引するもの日に増しつゝあり」に変化している。加えて組合が販路拡張に努力し生産者を援助したと述べ、結果として生産者の共同販売体制が

村々で進展している様子を伝えている。苫田郡内の木炭業が大きく変貌している姿が示されており興味深い。その間の同業組合の位置・役割も浮彫りにされているといえよう。

本節の最後に、生産地における同業組合の役割について「組合設置が組合員及営業品に及ぼしたる影響」の記述がかなり具体的に語っていると思うのでとりあげてみたい。少し長いがこれは全文掲げる。

従来本郡内木炭製造業者なる大部分の組合員は製炭に際し原木購入の時各自相当なる資金を要する為め自然之が調達に当たり伝統的に木炭販売業者より繰返し継続的に借入れ資材の購入をなせるを普通とせり、斯くの如きを以て折角製炭をなすと雖も資金借入先に於て木炭取引に際し比較的安価に取引せらるゝ為め意外なる損失を招きつゝありし事情の為め常に製炭業者は悲哀を叫びつゝあるのみならず、此自然的に來る不結果の為め知らず知らず不正木炭を製炭し之を取引に悪用する等の悪風に流れ遂に粗製濫造に陥り量目の不足濡炭の混入俵装の不完備等の産出ありて搬出の中途に内容物漏出し、或は多量なる風袋を使用し常に取引者間に於て批難苦情発生し声価に頗る甚大なる影響を及ぼしつゝありたるものとす、然るに組合設置後此弊害を除に掃蕩することに努力し漸次取引方法の改善を図りたる等其努力に依り近來着々実績を現はし製品の異変なく従て取引も円満に行はれ常に市価の変動を減退せしめ安全に其予定の収入を得るに至りたる等其効果相当あるのみならず、組合設置以前には相当不良商人ありて且不正木炭を之亦悪用して販売を行ふ等の場合ありたる為め、其の炭価に少からざる失墜を招く等の関係も相当多かりしも本組合の取締励行と検査の正確とに依り漸次之等を撲滅し声価の隆盛に赴くに至りたる等相当なる効果を挙ぐるを得たるのみならず等級別に依り生産者消費者間の直接取引の激増等を見るに至り、且量目俵装の統一撰別の良好品質の改善を促し一面運搬上俵装の完備に依り利便となりたる等其の効果を齎らしたること至大なりとす⁽²¹⁾

以上の記述をじっくり読めば、当郡製炭業の実態と問題点の基本的な部分が明快に示されているといえよう。元来木炭業においては製造業者が人数では大部分を占めているが、彼らは資金力がなく原木等の購入に販売業者からの資金借入を常態としており、この関係が木炭取引を製造業者に不利なものにし、引いては粗製濫造・取引上の問題等を導いた点はかなり具体的に説明している。こうした基本的問題意識を前提にして、後半では同業組合の果たした役割について自己評価しているのである。すなわち組合設置後は「此弊害を除に掃蕩することに努力し」と述べており、この弊害の除去を目標にして組合活動が展開されたと読めるのである。続いて「漸次取引方法の改善を図りたる等其努力に依り近來着々実績を現はし……」以下の叙述があるが、末尾にかけて「……相当な効果を挙ぐるを得たるのみならず等級別に依り生産者消費者間の直接取引の激増等を見るに至り」と述べ、その後の大きな変化として「生産者消費者間の直接取引の激増」を指摘している。生産者と消費者（需用者）との直接取引は川上郡でも増加したことが指摘されていたが、本郡でも大きな変化であったことは間違いなからう。

以上で苦田郡の検討を終えることにしよう。

4 真庭郡木炭同業組合

真庭郡の製炭業も製鉄業との関連はなさそうであるが、明治以降の生産地における実態と問題点、組合設置の意義等をどう捉えているかについて、「組合の沿革」が基本的なところをかなり伝えていると思うのでまずこれを窺っておくことにしたい。

真庭郡木炭同業組合設置前に於ては郡内生産木炭は其の質に於ては県下に覇を称へつつありしも佻装不整一にして樹種混淆し竿炭と粉炭とを混入し殊に甚敷は角炭と称して（最優良品）佻の両小口に長きは一尺以上も竿炭を露出して其の長きを誇るが如き状態なりき、加之往々、不正なる製炭者は佻を水で浸して秤量を盗むもの石又は未炭化物を混入するもの等ありて此儘に委棄するときは到底市場に於ける声価を維持す

ること困難なるは固より本郡唯一の副業たる斯業の浮沈に関する處なるを以て遂に大正十一年同業組合の組織を觀るに至りしなり。

組合設置當時に在りては当業者は徒らに従来の旧套に捕はれ組合の定款に違背し各自の利便を主張して物議を醸したること屢々なりしが其の趣旨の徹底を需給の大勢に順応するの必要は日に月に感知する所となり、改善年と共に顯著にして検査は励行せられ製品統一し従って価格の向上となり漸次名声を發揚するに至れり⁽²²⁾。

ここでは生産地にける商人（問屋、仲買人等）と生産者との関連についての指摘はみられないが、生産過程の実態を具体的に示している。いわゆる規格の不統一のほか、「佻を水で浸して秤量を盗む」等の不正炭の製造状況を前に、「此儘に委棄するときは到底市場に於ける声価を維持すること困難なるは固より本郡唯一の副業たる斯業の浮沈に関する處なるを以て」という認識から、同業組合が結成されたとする。組合結成後も問題の除去は容易ではなかったようであるが、「需給の大勢に順応するの必要は日に月に感知する所となり」、改善されていったと記している。ここでの「需給の大勢に順応するの必要」というのは、既に他郡の事例から判明したこの時期の岡山県内外の市場構造の動向を念頭に置いたものといわねばならないだろう。

本郡については、生産・流通構造の変化と同業組合との関連について他にはあまりないが、「取引の変遷」についての記述に若干指摘があるので、その部分を掲げることしよう。

……輓近鉄道の布設其の他陸運の開発と木炭同業組合の設置とにより阪神、東京、京都、名古屋方面に移出するもの漸次増加の傾向ありと雖も古き顧客たる岡山市の需要は依然として主位を占め居れり⁽²³⁾。

ここでは交通の発達と同業組合設置が販売市場の拡大に寄与したと明記している点に留意したいが、他郡の場合と共通する指摘といえよう。

5 岡山県久米郡木炭同業組合

最後に久米郡木炭同業組合であるが、生産・流通と同業組合との関連についての記述は明示的には見あたらないといえるが、「組合設置が組合員及営業品に及ぼしたる影響」の記述があるので取りあげることにしたい。

組合の設置は品質の向上、容量の正確俵装の完備を期すること検査の主眼なるを以て各検査員は夫々生産者に対し其の意志を説示すると共に検査を公正厳格に実施しつゝあり、故を以て組合設置以来組合員も大に自覚し品質の向上に容量の正確に俵装の完備に努力しつゝあり、ために営業品の声価を高め郡内消費者は勿論郡内販売業者より多大の歓迎を受けつゝあるは確かに組合設置の効果と謂ふべし⁽²⁴⁾。

組合の設置は品質の向上と容量の正確俵装の完備（これは規格の統一といえよう）を眼目としその為に検査を実施するのだと記しているが、組合設置以来「組合員も大に自覚し品質の向上に容量の正確に俵装の完備に努力しつゝあり」と組合活動を評価している。ここで注目しておきたいのは、次に「ために営業品の声価を高め郡内消費者は勿論郡内販売業者より多大の歓迎を受けつゝあるは確かに組合設置の効果と謂うべし。」と記している点で、商人を含めた消費市場の動向に着眼している点にも留意したい。

おわりに

本稿は資料の提示に終始しているといえるが、その趣旨は冒頭で述べたように、岡山県の木炭同業組合の動向はこれまでのわが国の同業組合（政策）史研究が十分に光を当ててこなかった側面を相当にわれわれに示していると思われたからである。それを資料で裏付けておきたかったということである。つまり従来の一般的理解は多少ニュアンスの違いはあれ、大正期以降の少なくとも大正末以降の同業組合はこの時期の生産流通構造の変化に対応できなくなりむしろ流れに逆行する存在として捉える考え方が

支配的であったといえる。大正末以降の工業組合政策をはじめとする同業者組織化政策の新展開を軸に捉えるならば、全体動向の趨勢であるからそう判断するのもうなずけるのであるが、それだけではわが国の同業組合（政策）の歴史的意義を正当に把握したことにはならないのではないだろうか、こうした疑問が筆者をここ数年捉えていたといえる。

こうした研究方向に基礎を与えてくれたのは石川県の絹織物業の同業組合研究であった⁽²⁵⁾。石川県の小松織物同業組合に焦点を当てた一連の研究を通じてその思いはかなり明確となった。その延長線上で岡山県の同業組合を少し丁寧に検討するようになった時、石川県の小松織物同業組合の事例は必ずしも独自のものではなくわが国の同業組合に普遍的にみられる一側面ではないかと考えるようになったのである。

『岡山縣重要物産同業組合誌』は実は10数年前から眺めてはいたが、どう利用していいか解らなかった。非常に貴重な資料になるのではないかと感じてはいたが、料理方法が解らなかったのである。しかし木炭業の部分をくり返し読んでいくうち先の小松織物同業組合の動向と極めて共通性があることが実感されるようになった。以上は本稿の舞台裏の事情である。

確かにわが国の同業組合は巨大な山をなしているようである。日本が遅れて資本主義経済への歩みを始めて以降太平洋戦争期まで制度として残存した同業組合は大正末以降量的には衰退化に向かうことは事実であるが、その全体動向の背後にあってそれぞれの段階で地域経済の中でどのような働きをしたかきめ細かく検討する必要があるように思う。その作業を通じて日本経済における同業組合の歴史的意義が真の意味で見えてくるのではなからうか。

いずれにしても本稿の作業に意義があるとすれば、岡山県における木炭同業組合は大正期以降の生産・流通構造の変化に対応して重要な役割を果たしたことを明確にした点にある。そしてその場合、地方行政の政策的関与も重要な要素として指摘したことである。

註

- 1) 竹内庵「岡山県重要物産同業組合連合会の成立」(『四国大学紀要』人文・社会科学編, 第38号, 2012年)。
- 2) 以上は竹内「岡山県重要物産同業組合連合会の成立」を参照。
- 3) 『岡山縣重要物産同業組合誌』(岡山県重要物産同業組合連合会, 1930年)。以下『組合誌』と略す。
- 4) 竹内庵「岡山県における綿織物重要物産同業組合の動向」(『四国大学紀要』人文・社会科学編, 第36号, 2011年)。
- 5) 因みに6組合の名称については、『組合誌』5頁に掲載の一覧表では、6組合すべて頭に「岡山県」が冠せられているが、本稿では本文中の個別組合の説明資料の冒頭に表示された名称に従った。
- 6) 竹内「岡山県重要物産同業組合連合会の成立」参照。
- 7) 『組合誌』471・472頁。
- 8) 『組合誌』472・473頁。
- 9) 『組合誌』474頁。
- 10) 『組合誌』474・475頁。
- 11) 『組合誌』491頁。
- 12) 『組合誌』498・499頁。
- 13) 『組合誌』500頁。
- 14) 『組合誌』500頁。
- 15) 『組合誌』488・489頁。
- 16) 『組合誌』507頁。
- 17) 『組合誌』522頁。
- 18) 『組合誌』525頁。
- 19) 『組合誌』506・507頁。
- 20) 『組合誌』509頁。
- 21) 『組合誌』516・517頁。
- 22) 『組合誌』517・518頁。
- 23) 『組合誌』519頁。
- 24) 『組合誌』536頁。
- 25) 竹内庵「石川県小松織物同業組合の機能」(『同志社商学』第56巻第5・6号, 2005年), 同「同業組合から工業組合へ」(『四国大学紀要』A人文・社会科学編, 第27号, 2007年), 同「大正末～昭和戦時期における小松織物同業組合の活動の多様化」(『四国大学紀要』A人文・社会科学編, 第28号, 2007年), 同「石川県能美郡における同業組合と工業組合」(安藤精一・高嶋雅明・天野雅敏編『近世近代の歴史と社会』清文堂, 2009年), 同「石川県における工業組合の展開と同業組合」(『四国大学紀要』人文・社会科学編, 第34号, 2010年)等を参照。

(竹内庵：四国大学短期大学部経済学研究室)

抄 録

岡山県の木炭業に関わる重要物産同業組合は、他の業種に比較して設立が遅く大正中期以降であったが、県内6郡に設立されていた同業組合の活動を仔細に検討してみると、従来の同業組合(政策)史研究が捉えきっていなかった部分が相当明瞭になってくる。端的にいえば、岡山県の木炭重要物産同業組合は大正末～昭和初期の時期に全国的な木炭市場の構造変化に対応して、明治以降の生産・流通過程の改革に極めて重要な役割を果たしたことがみえてくるということである。本稿はこうした点を資料に基づいて実証した。

キーワード：同業組合，昭和初期